原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百八十九号

原告団レポート

CO患者――石本 恵さん

がんばれ、石本さん！

その機能回復意欲を触発した、妻の大病

飲酒癖ピタリやみ、人間が変わる

三川鉱入社

CO患者の石本 恵さん。六十八歳。熊本県玉名郡岱明町大野下字目倉尾というところ。田園地帯に住んでいる。昭和五十三年の七月、それまで長く住んできた荒尾市原万田社宅百二十棟の鉱員社宅から、家族とともに移り住んできた。

家族は三人。妻のスミ子さん、五十四歳。夫の石本さんより十四歳下。長年にわたった満州での生活と、続く兵役に禍いされ、婚期を逸しかけていたところに恵まれた縁だった。結婚は、昭和二十二年五月。石本さんが三十六歳、妻のスミ子さんはなんとまだ二十歳のときのこと。

太平洋戦争での日本の敗北と同時に兵役を解除され、郷里の阿蘇に帰り、そのまま農業を営む父のもとで暮らすうち、スミ子さんとめぐり合ったのだ。

結婚した石本さんは、やがて炭鉱で働きながら生計を立てることを決意。大牟田へ。願いかなって三川鉱へ入社した。彼が、長い在満時代に身につけた優れた土木技術が買われたか、ふり当てられた仕事は初めから採炭だった。甲方に所属して、三交代勤務。昭和二十三年一月のことであった。

初めのうちこそ、荒尾市内の某質屋の二階住まいで苦労したが、やがて前記の原万田社宅へ。こうして、石本さん夫婦の炭鉱労働者としての生活が初まる。

子どもは二人。長女を雪子さんといい、二十八歳。電々公社玉名電報局に臨時従業員として働く。長男を恵志さんといい、二十六歳。昨年東京の某大学卒業後、同じ玉名市の玉名中央病院の総務課に就職。ともに、両親のもとから通勤。

坑内火災で

さて、CO患者といっても、石本さんは例の三池大爆発に被災したのではない。大爆発から四年ほどたった昭和四十二年九月二十八日、あの大爆発をひき起こしたのとまったく同じ三川鉱でくり返された大災害――坑内火災に被災。思わぬことで、CO中毒患者の身に。

坑内で消えた労働者の命七柱。それに、新たにつくり出されたCO患者四百人をこえる。石本さんは、そのなかの一人なのである。

彼の、CO患者としての生きざまもまた、例にもれず凄惨な症状をもって開幕する。

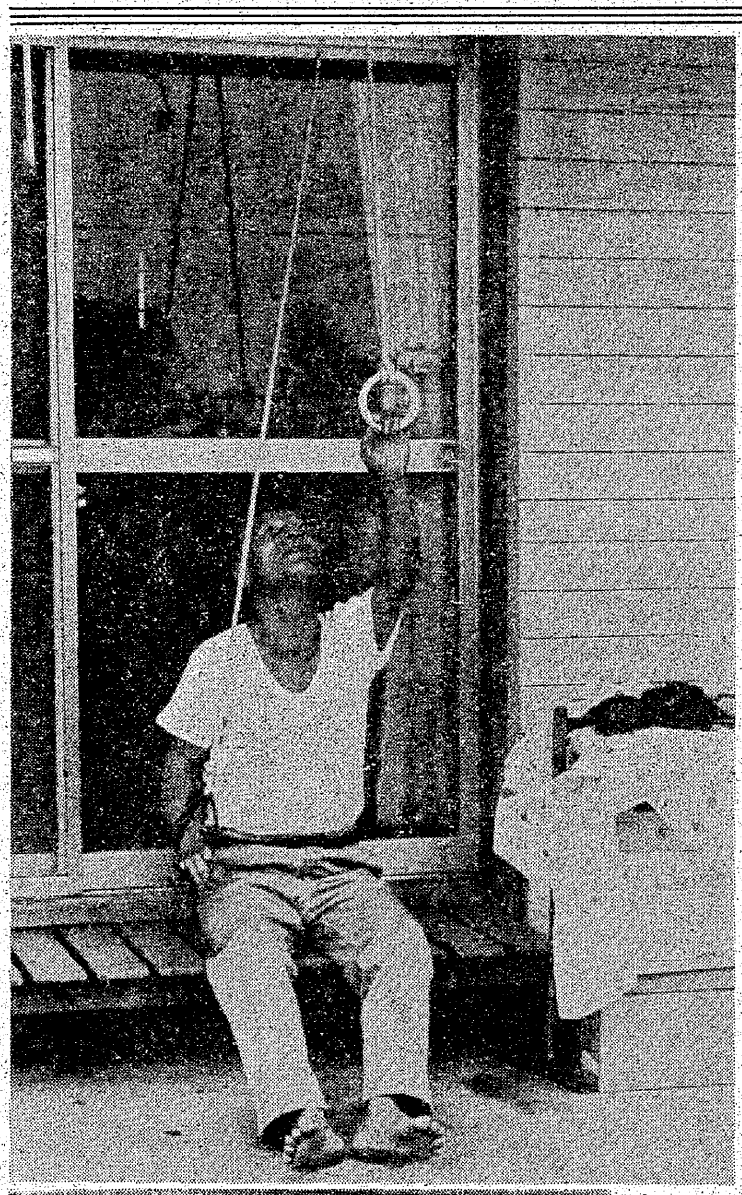
中毒症発病

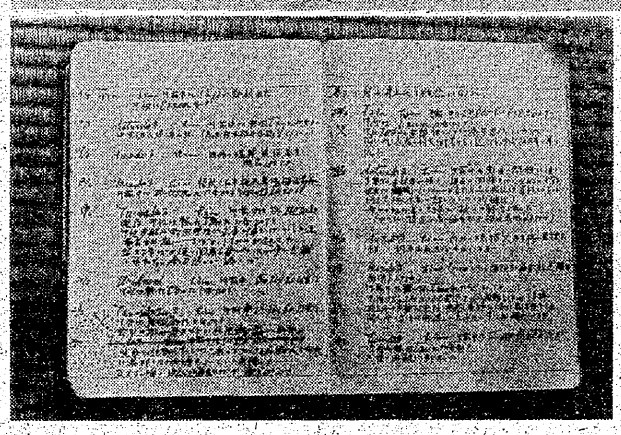
その日、荒尾競馬場はにぎわっていて、馬券を売るのが係だったスミ子さんはいそがしかった。

そこへ不意に、三川鉱で坑内火災が発生、大災害が生じているとの知らせ。

とるものもとりあえず、夫がかつぎこまれたと聞く病院へ。そこで見出したのは、これはいったいどうしたことか、凄い剣幕で興奮していて、とうてい夫の姿とはけとれなかった。

しばらくして少し落ちついたところへ、やってきた医者はいった――「安定剤をうってあるけん、家につれて帰って寝かしといてください」。





上は、自分で考案した腕の機能回復訓練用具で汗を流している石本さん。左は書き続いている日記。

家につれて帰る。そのとたんに彼は再び興奮状態へ。両眼をカッと見開き、がばと立ち上がっては叫び声をあげた。

「そら、あっちだ、あっちだ。いや、こっち、こっち。こっちに逃げるんだ。そら……」

今から思えば、彼のそのときの切れぎれな意識のなかには、きっと、猛火のなかを仲間ともども逃げまどった恐るべき記憶がよみがえり、それが彼の心のなかに強い恐怖を呼び起こし、かくも彼を狂わしたものに違いなかったが…。

こうして、彼は病院へ逆もどり。長い入院生活が始まる。

酒呻っては

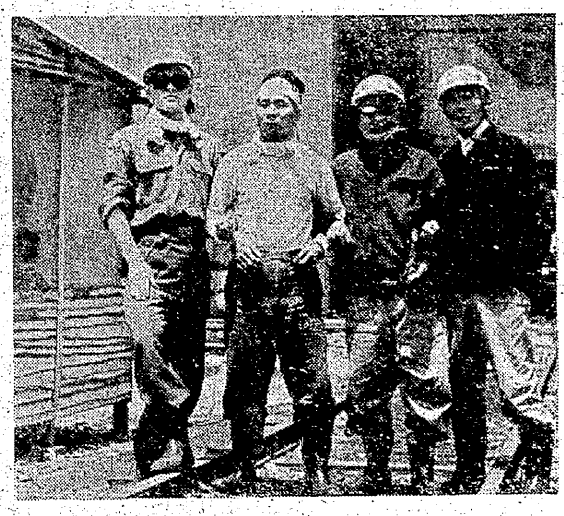
そのうち、初めの興奮状態こそ影を消していったものの、後には泣き暮らしたことだろう。

CO患者に共通して見られる諸症状が姿を現わしてくる。不眠、いらいら、頭痛、もの忘れ、腕や脚の激痛に機能マヒなど。非情ながら、性機能障害までも重なって。

これらの症状が、以後は昼も夜も離れず石本さんを苦しめてゆく。第一、人間そのものがガラリ変わってしまった。日ごとつのってゆく頑固さ。自分がこれと思いこんだが最後、たとえ、どこのだれが何といおうと、絶対に自分の考えを改めることをしなかった。

やがて市内の病院から、吉野の大牟田労災病院へ移る。皮肉なことにこの転院が契機となって、そのうえ彼は酒を呻るようになる。禁を破っては病院で呻るばかりでなく、試験外泊で原万田社宅の家に帰ってはそれを呻った。

酒がはいると、普通の健康体の者でさえとかく感情がたかぶり、ひとに喧嘩を売ったり、わけもなく泣きわめいたりするものだ。それが、どうしようもない複雑な中毒症の責め苦の吐き場にこまっているCO患者では、ましてのこと。彼の感情はいっきに増幅、とりわけ自宅での爆発は手がつけられなかった。妻のスミ子さんは、あまりの恐ろしさにしがみついてくる二人の子どもをしっかりと両の腕に抱きかかえながら、幾たびこの自分はどうすべきか、大きな課題を背負うことになった。



三池闘争最中、積極的に闘いに参加していた石本さん（向かって左から二人め）。仲間とともに、りりしい姿がある。

妻たおれる

それでも彼女はCO中毒症に苦しむ夫をささえ、二人の子どもをかかえ、身を粉にして働いた。

昭和四十四年からは、競馬場の馬券売りよりもっと安定した収入がほしく、意を決して大牟田の大化学工場の一職場で働くようになる。半分は現場事務で、半分は工場が吐き出す染料製品の荷造りや運搬。もちろん下請工だった。惨胆たる家庭環境に耐えながらの労働。その苦労のなか、二人の子どもを立派に育てあげる。特に男の子は、東京の大学までも卒業させたほどだ。

だが――、そんな積もり積もった心労がひきガネにでもなったものか、彼女自身が甲状腺腫という難病にとりつかれてしまう。五十三年のことで、急に声が出なくなり、荒尾市民病院に入院。そして大手術。からくも健康を回復することができて、退院。発声障害の痕を残したままではあったが、とりいそぎ職場に復帰、ひき続き働き始める。

ところが昨年の九月のある日のこと。その頃はもう岱明町の現住所に居を移していたが、家にいるとき、突然呼吸困難に落ちいって苦しみ始めた。

こんどは、荒尾市民病院では手当ての法なく、救急車でそのまま熊本大学医学部付属病院へ。応急検査の結果、甲状腺腫、リンパ腺腫に肺の故障までが重なった、恐るべき病気とわかった。

直ちに、放射線やレントゲンなどを駆使しての科学治療がスタート。「命の保障はない」との診断は、予想はされたものの、CO患者の石本さんにとっては、さすがにはかり知れない衝撃となったのだった。それまではその命を妻にささえられてきた身が、こんどは一転して妻の命をささえるためにこの自分はどうすべきか、大きな課題を背負うことになった。

人間、何がさいわいするかわからない。そこに神の助けでもあったものか、このときの衝撃が導火線となって彼の人間が三転する。それまで、あれほど呻り続けてきた酒がぴたりとやみ、以後完全に口にしなくなった。そればかりがそれまでとかく怠り勝ちだった機能回復訓練にも、自らすすんで積極的にぶつかっていくようになった。現に自宅の軒下には、一度はほとんどマヒしてしまった左腕の機能回復訓練用の、鋼製の用具さえ備えつけられている。自分で創り出したものだ。ゲートボールでは、二級審判員の免許を獲得。

治療の甲斐あってか、妻のスミ子さんは不思議と命を恵まれ、今春退院。今は心暖い夫――石本さんとともども、大病のからだを休めながら、「もういっぺんは、化学の職場に帰って働こうと思っています」、と心強い。

妻はさけぶ

もともと、満州国政府の一機関――建設庁土木課がすすめる現場の建設事業に働くうち、優れた土木技術を身につけることのできた石本さん。だから、採炭工として働くにも、決して人に遅れをとる人間ではなかった。

同時に、あの「英雄なき百十三日の闘い」といい、「安保と三池の闘い」といい、仲間とともによくがんばった。病院での機能回復訓練に通い続ける今の彼に、そんな、かっての日の頼もしい面影をさがすのはむずかしい。

「主人のからだを、こんなにしてくれた会社は知らん顔。病院に支払うお金は、ひどい目にあわされた本人もち。せめて、医療費くらい会社負担が当然でしょうに。私にはわかりません」

スミ子さんは、さけびともとれる言葉で語りかけるのだ。ともあれ、石本さん、それから妻のスミ子さん、よくがんばりました。